

【京都府PTA協議会会長賞】

闘いの果てに

亀岡市立東輝中学校 3年 宅間 泰聖

僕は小1の2学期まで普通の元気な子どもでした。しかし、ある時、高熱を繰り返すようになりました。近くの小児科に通っていましたが、なかなか原因が分からず、大きな病院を紹介してもらいました。幼かった僕は不安いっぱい母に連れられ、大きな病院で診察を受けました。そして、こう診断されました。

「急性リンパ性白血病」だと。その病名を聞いても、その時は何も分からない年頃でしたが、母の顔色がなくなっていくのを見て、僕はとてもショックでした。初めての入院生活が始まり、母も仕事を休み、ここから僕と病気との闘いが始まりました。僕の入室した部屋はクリーンルーム。その部屋に入ると、外出は許さず、トイレも部屋内で済ませ、先生や家族も、僕に合うには消毒をしてマスクをして、手袋をつけなければならなくなりました。僕は何か申し訳ないという心が芽生え、面倒だから、もう面会に来てくれなくなるのでは...と心配になったりしました。

入院して間もないころから抗がん剤を投与される治療がつづきました。大嫌いな注射との戦いの連続でした。髪の毛が抜けてずっと帽子を被ることになりました。そして、初めての手術。胸に穴を空け点滴用の管を入れてその中に薬を入れるのです。あの初めての手術の前を思い返すと、幼い僕にとって地獄でしかありませんでした。

麻酔が覚め気がつくと、全ては終わっていました。僕の体には病院の先生たちが必死で命を救おうとして下さった手術のあとが残っていました。その傷跡を触りながら、「自分の体、がんばったんやなあ」と思うと、なぜだか涙が溢れてきました。痛みもありましたがそれ以上に達成感もありました。しかし、僕の病はそれだけでは終わりません。麻酔をしても強烈な痛みを感じる腰への注射、憎っくき骨髄検査があるのです。僕を恐怖に陥れるこの強敵の名を、僕は「ゴリゴリ」と名づけました。ゴリゴリは僕がへこたれそうになっても何度も何度もやってくるのです。もう自分の周りの全てが嫌なことにしか見えなくなりました。あと、いくつ乗り越えればいいのか...。

そんな毎日の中で、担当の先生たちはいつも明るく話しかけ、面白い話ばかり僕にしてくれました。診療のあとは笑顔になっている自分がいました。そうして、母や看護師さんに支えてもらって、約8ヶ月の入院は終わりました。夢の瞬間でした。本当にうれしかったことを覚えています。

しかし、退院はしたものの、まだ治療が残っていました。完治といってもらえるまでには通院治療が終わってから5年もの時間が必要です。頻繁に血液検査で再発がないかチェックするのです。点滴を受けながら、小学校に1時間、2時間とならし登校から始めました。退院してもクラスみんなになかなか会えないことや、黄色い液体の薬を体に入れることが嫌で嫌で仕方ありませんでした。その薬だけは、何故か僕は、見ただけで気持ち悪くなり吐いてしまうのです。

小5になり、治療が全て終了し、血液検査だけになったときは退院の時と同じくらいよこびました。普通に学校に行けて、好きなものが食べられて、好きな所へいける「みんなと同じことができる」というだけで、とても幸せなことなんだね。」と母に言われ、僕は改めて健康でいることの幸せを、噛みしめました。今年の5月、担当の先生から「完治です」と、待ちつづけた天にも昇るような言葉を頂きました。「よくがんばったね。」という思いやりの言葉とともに。心や体がへこたれてしまいそうになることが何度も何度もありましたが、そんな時も母は僕のつらさを全て自分のつらさのように一緒に感じてくれました。僕は1人でこの病と闘っているのではないと強く感じました。今は本当にあきらめずに頑張ってたよかったですと思っています。

僕のように病気と闘って絶望の淵に立っている人はいっぱいいると思います。体は元気でも、大きな悩みを抱えて心が悲鳴をあげている人もいるでしょう。でも、あきらめないでほしいと思います。僕はもう、この先どんな苦しいことがあっても前も向いて進みます。だって頑張れば、絶対に幸せはくるからです。今は普通に元気よく学校に通っています。どんなことにも強い気持ちで前を向けば必ず結果が出て本当に気持ちのいい瞬間が訪れる、僕はそう信じています。